やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌　　名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	20 / 2006 / 34-35
タイトル	「しらかばビオトープ」に現れた生きものの変遷 (1)
著　者　名	五十嵐正俊

「しらかばビオトープ」に現れた生きものの変遷(1)

第３代　五 十 嵐 正 俊

はじめに

顧問の小山内　孝先生が「しらかばビオトープ」を自費で造成された経緯は前号で先生が書かれているのでおわかりのことと思う。

ビオトープを造った場所は場所は我が家の近くで、ビオトープまでの距離は小山内先生より私の方が近い。しかも私の書斎の窓からビオトープの半分は一望できる。水源になっている湧水は我が家の土地と隣地(空き地)の崖下から湧き出ていると言う関係にある。したがって、ビオトープの持ち主である小山内先生よりは頻繁に足を運んでいるのかも知れない。また、子どもの頃から水辺の生きものとくにトンボが大好きだった私にとっては願ってもないビオトープの出現だったわけである。

一時宅地開発業者が残土をかさ上げして 8m 近い崖が出現するような噂が流れたこともあった。一面の荒れ地で笹藪になっていた斜面では春になればウグイスが囀り、笹藪の中では良質のワラビが採れたので近所の方が販売用のワラビ採り場に利用していた。　私も故郷の青森に引っ越しして間もない頃だったので、ご近所にどんな方が住んでおられるのかほとんど不明であった。35 年間故郷から離れた暮らしだったので浦島太郎のように、生まれ育った故郷青森の様子は全く不明で、振興住宅地など土地勘もなかった。

子どもの頃親しんでいた「メダカ」や「トンボ」そして「サルガニ＝ニホンザリガニ」などがどうなっているのか気になっていた。少しずつ行動半径が広がるにつれて「メダカ」「ザリガニ」などが点状の分布ながらまだ生き残っていることが分かりかけてきていた。

丁度その頃、インターネットで検索したら「メダカ保存会」(福島県鈴木広茂会長)が「日本野生メダカ保存会」を立ち上げて全国の情報収集中であるが分かり、少ない情報ではあったが、青森市における情報を送った。ところが、青森からの情報提供者 1 号ということで支部長なる肩書きに指名された。後に全国 3 名の副会長の一人に指名させられている。時を同じくして「メダカ問題懇談会」なる会合が開かれる情報を新聞で見て、傍聴で顔を出してみた。その時、委員の一人として出席されていたのが生物部顧問だった小山内孝先生だったのである。

小山内孝先生の名前は知っていたが、初めてお会いしたのであった。しかも家のすぐ近くの「しらかば保育園」の理事長だったのである。以来、小山内先生とは何かにと行動を一緒にすることが多く、このことが縁で弘大教授の佐原先生や東先生など淡水魚専門の先生方ともお会いすることが出来た。そして、青森市内に造成されたメダカ用ビオトープ「あずましの水辺」「共生の郷」「横内遊水池」などにも多少の関わりを持つ関係になっている。

しらかばビオトープ最初の生きもの

笹藪に重機が入り、最初の池が掘削されたのは 2002 年 5 月のことであった。

素堀でドーナツ型の穴が掘られ、2m ほど掘り下げられた穴には自然湧水が溜まり始めていた。設計図も何もないその時の気分次第？の様な状態で笹藪が踏みつぶされ赤土がむき出しになっていた。ある日、水の溜まった穴を見るとボウフラが発生していたのである！　近くに住む住民の一人とし

て蚊の発生地を見過ごすことは出来なかった。そこで急遽三内遊水池でメダカを捕獲してきて水が溜まったばかりの池に放流した。この時の放流数は 15～16 頭であった(最初の個体数が不明確で申し訳ない！)。この時小山内先生には事後承諾だったと思う。放流したメダカの何頭かはその後も放流地点付近を泳ぎ回っていた。

[写真1] ヒメゲンゴロウの成虫

[写真2] マツモムシ腹面

[写真3] マツモムシ背面

[写真4] ウスバキトンボの成虫

[写真5] ウスバキトンボの終齢ヤゴ

素堀の穴でも水が溜まれば真っ先に飛び込んでくるのが「ヒメゲンゴロウ」「アメンボ」「マツモムシ」など飛翔力のある鞘翅目、半翅目(セミ目)などの昆虫である。これらの昆虫たちは水辺の昆虫としてパイオニアなのであろう。たとえ、一時的な水たまりでも手作りの池でも水があればやってくるのである(底が土でないと無理?)。

その後、梅雨の中休みの頃になって、晴れ渡った青空の下にどこから現れたのか飄々と漂うばかりでなかなか止まって呉れない「ウスバキトンボ」が現れた。

この「ウスバキトンボ」のヤゴは新しい水辺にいち早く発生するヤゴで、「しらかばビオトープ」でもまだ工事中の水たまり状態のところに発生したのを認めている。同様の現象は合子沢記念公園の小さな丸池、国際芸術センター青森の野外ステージ前の飾りプールなどでも観察している。「ウスバキトンボ」のヤゴは日本では越冬出来ないので毎年、南方から繁殖を繰り返しながら北上してくることが知られている、ヤゴの生育期間は 40～50 日といわれ極端に短いそうだ。したがって、水の張られた水田などで急速に繁殖を繰り返しながら梅雨の晴れ間頃、ようやく青森に到達するのだろう。

2002 年の秋には「ウスバキトンボ」「クロスジジギンャンマ」「シオヤトンボ?」(シオカラトンボ型の若齢ヤゴ)などのヤゴが発生していた。

また、「ウスバキトンボ」のヤゴは国際芸術センター青森の様な餌の少ない人工的な場所では終齢のヤゴまで育った個体どうし盛んに共食いをしながら生活しているのが観察されている。「ウスバキトンボ」はこの様に非常にしたたかな繁殖戦略を持ちながら各地を渡り歩いているトンボなのであるが、生態系が平衡状態に移って行くに従いほとんど見られなくなる。これは他の捕食者達が最も活動力の旺盛な夏季に産卵・孵化するので、卵から孵化した小さなヤゴ達はたちどころに食害されるためではないだろうか?

だから、新規の水たまりを繁殖拠点に選び、短期間で世代を繰り返す特殊な生活環を持つことになったのであろう。

(次号に続く)